

小松城と前田利常

小松城は、関ヶ原合戦後江沼・能美郡が前田家領となったことにより前田家がその主となった。これ以前の城主は丹羽長重であった。

合戦が終息した慶長五年（一六〇〇）九月、前田利長と丹羽長重は和議を結ぶが、条件として利長の弟猿千代（利常八歳）を丹羽家の人質とすることとなる。しかし石田方に組した丹羽長重は蟄居となり、慶長八年には常陸国に一万石を領している。これにより利常の人質生活は終わるが、利長の嗣子となる慶長九年までを小松城で過ごした。翌十年利常は前田家を嗣ぎ藩主となる。これにより金沢に移り小松城は城主のいない城となる。

小松城での生活から四〇年ほど過ぎた寛永十六年（一六三九）、利常は隠居

の地を小松城に定め、住居や石垣の作事を命じた。小松城の再興である。

隠居の地を小松に定めたのは、「小松之義、御故郷御同時ニ思召候義ニ候」（新修『小松市史』資料編1）によるものである。小松城は利常が育ち、隠居して死を迎える城ともなった。

利常の城造りは、隠居・入城した寛永十六年より没する万治元年（一六五八）まで続く。

寛永十七年（一六四〇）には三か国に竹木・石の調達を命じ、慶安二年（一六四九）には作木・植木の小松移送が加賀藩を挙げて行われ、作庭が大がかりに進められた。

具体的な造作では、正保三年（一六四六）新殿の造営、慶安元年（一六四八）中土居に広式造営、慶安二年の葺



慶長5年(1600)前田利長起請文(福島県二本松市教育委員会提供) 傍線部「弟猿(利常)を遣候」



小松城櫓台

嶋うさぎ門の台石の設置、承応元年（一六五二）の葭嶋に「山崎の御数寄屋」の建設などが知られるところである。中には金沢城大手櫓の台石まで小松城御用として移動しようとした話まであり、利常の小松城整備に懸けた情熱がいかにほどのものを伝えてい

る。利常の死後、城の改廃・整備はあ

たが、本丸を核として水路が巡り、この外側に二の丸・葭嶋・枇杷島を配し、これらも水路で囲い、更にその外側には三の丸と武家屋敷が配され、東西三町五二間、南北五町五五間の空間に、七つの島からなる水に浮かぶ城を誕生させた。

（宇佐美孝）



万治2年（1659） 以往加州小松城図（金沢市立玉川図書館所蔵） 前田利常晩年期の小松城の様子を描いたものと考えられる。



前田利常画像（那谷寺所蔵）